

曹禺『王昭君』小考

— 創作エピソードをめぐって

坂 野 学

曹禺（本名、万家宝。1910－1996年）の歴史劇「王昭君」は1978年に脚本が完成し、翌年の建国30周年の記念となった作品である。発表された時点では非常に高い評価を受け、記念作品中の第一等作品の名誉を受けた。作品は盛んに舞台上演されるだけでなく、映画化の話が進み、作家自身も映画化に積極的に参加している。また、京劇への改編も行われ、そのことが京劇女優との結婚へと進展し、公私にわたって幸福の果実を十分に味わうこととなった。

おそらく、「王昭君」が曹禺の最後の劇作となるとは誰も考えなかっただろう。新中国成立以来、発表されたのがわずか3作品と極端に少なかった「中国のシェイクスピア」が、文革の嵐を乗り越えて、歴史劇に新境地を拓き劇作家として復活したのだ、と多くの人が作家の今後に期待したにちがいない。

ところが、事態はそううまくは進まなかった。しばらくすると、「王昭君」に対する否定的な評価が提出され、褒貶入り乱れ、「これは曹禺先生の手になる作品ではなく、別人がこしらえた贋作だ」とまで言われるようになった⁽¹⁾。高評価とともに自信を取り戻したかにみえた曹禺は、自ら自作を否定するようになり、この後ついに次作を完成させることはなかった。

小論では、その原因の一端を創作にまつわる周恩来とのエピソードに求め、かつその中に作家側にあった問題を探りたい。

—

曹禺が「王昭君」に対して否定的に評価するようになったのは、早くも1980年のことである。曹禺研究の第一人者田本相の1980年6月22日インタビューは次のようである。

田本相：多くの人があなたが解放後に書くのが少なすぎると思っています。ご自分ではどう思っているのですか？私もあなたに『明朗的天』『胆剣篇』『王昭君』について語っていただきたいのです。

曹 禺：その通りだ。解放後だけじゃない、生涯において書いたのがきわめて少なすぎるんだ。……。解放後に書いた三篇の劇については、話す必要はないだろう、本相、君はちゃんとわかるはずだ、ほんとにたいして言うべきことはないんだよ。(2)

田本相は、「実は、私は何度か彼にこの三篇の劇について話してくれないかとお願いしたが、三篇の劇について話が及ぶたびに、彼はすぐに首を振って、私にやめさせた、まるで語るに値しないとでもいうようだった」とこの箇所にも補足の言を加えている。

1979年の栄光に較べてこの1980年の落胆ぶりが尋常でないことは明らかだろう。

同じく、田本相のインタビューから曹禺の旧知の友人の批判的な声を拾っておこう。

曹禺と南開大学の同期生で警官大学教師をしている楊善瑩は、1982年4月27日のインタビューで、

田本相：曹禺先生の伝記を書くためには、あなたのところを訪ねなさい、

と曹禺先生からいわれたのです。どうぞ、あなたが理解しているところの曹禺についてお話し下さい。

楊善瑩：彼の伝記を書いてどうするんだね？必要なのかね？彼について話すのはいいけど。…。彼が『王昭君』を書いたけど、私は「君があんなふうを書くのは話にならないな」と言ったんだ、彼は周総理が書けって言ったんだよと言ったよ。近頃書いているのはろくでもないよ、この劇はだめだね。⁽³⁾

楊善瑩は、親友の気安さから、曹禺に面と向って否定的な評価をぶつけているのだが、それにたいして、「周総理が書けって言ったんだ（原文：周総理讓他写的）」という曹禺の返事には驚かされる。何か書きたくもないものを書かされた、といった不満の表出とも受け取れる。

上海戯劇学院副院長の孫浩然も、1982年5月24日のインタビューで、「家宝（曹禺の本名）はリスクを負うのを嫌うんだよ。『王昭君』は総理が言わなかったら、彼だって書こうとしなかったよ」と答えている。⁽⁴⁾

二

旧友ふたりのことばからもわかるように、「王昭君」は国務院総理周恩来の求めで創作されたものだ。ただそれは、20年ほど前の「大躍進政策」期のことである。周恩来は曹禺にとって南開大学演劇サークルの大先輩にあたり、親密な関係にあった。この「求め」は決して上から下への命令という性質のものではなかったはずだ。もし、周恩来の「求め」ということが全く伏せられて、人々にとってその創作契機が曖昧なままになっていたら、事態は別の様相をみせていたように思われる。

この周恩来の「求め」について曹禺は何度か語っているのだが、その内容

は細かいところで違って、事実がいかなるものであったかを認定するのは容易ではない。煩瑣にはなるが、曹禺の自述をもとに研究者が再現したものを含めて、少し長めに引用して検討を加えることにしたい。16年ほどの歳月を隔て完成をめざすことになった経緯についても併せて理解しておくためである。

A 曹禺「在新的長征的道路上」（初出 『人民戯劇』1978年第4期）

「私は今敬愛する周総理が生前私に書くようにと求めた（原文：「要」）脚本『王昭君』を書いているところですが、すでに二幕分を書きました。なんとかがんばって早ければ数ヶ月内に、遅くとも今年中に完成させたいと思っています。この脚本が完成したら、さらに社会主義時期の三大革命運動を描く脚本を書きたいと思っています。」⁽⁵⁾

これが、「王昭君」の創作とそのきっかけが周恩来からの求めであることを公言した最初のものである。次作は再び現代劇、それも革命運動を中心に据えたかなり大型の劇に意欲を見せていたことが注目される。

B 趙浩生「曹禺從『雷雨』談到『王昭君』」1978年5月

（初出：香港『七十年代』1979年2月号掲載）

趙浩生：万先生、先生は現在ある歴史劇を書いているとことだと聞いたのですが、そうですか？

曹 禺：そうです。『王昭君』です。これは周総理が当時私に書くように頼んだのです。私が少し書いて完成しないうち、その後「四人組」が権力を握るともうおしまいでした。周総理でさえおさえられなくなりました。あるとき、「四人組」が私を引っ張って行っ

たのですが、周総理が彼らに私を監禁することを絶対許さなかった
たので、彼らは私を釈放したのだ、と私は聞きました。このこと
は後になってから聞いたのです。周総理はなにかしても「ああ、
私はあなたにどうこうしてあげた」と言うことはけっしてありま
せん。これは中国人のいいところですね、自慢することを好まず、
ひどく胸の内を表に現さず、口に出さないのです。

趙：先生はこれからどんなものを書く予定ですか？

曹：ひとつの新しい考えがあるんです。つまり以前書くことができな
かったものを書こうと思います。最初に周総理が私に頼んだ（原文：
「嘱咐」）歴史劇『王昭君』を書きたい。その脚本では民族の団結を
描きます。中国には50あまりの民族があつて、各民族の間で団結
が必要です。私はとても書くのが喜びですし、書き上げたいと思っ
ています。（6）

この中国系米国人・趙浩生のインタビューも、作品がまだ完成していない
段階のものである。ここでも曹禺は周恩来から頼まれたことを明言している
が、全体は周恩来への賛辞が強く出ている。ただ、発言からは曹禺自身がこ
の創作のテーマを「民族の団結」に見いだして、創作の意欲を喜びとともに
語っているのがわかる。

C 曹禺「献辞」1978年10月12日（『王昭君』四川人民出版社 1979年2月収録）

華主席と華主席をはじめとする党中央が「四人組」を粉碎し、この『王
昭君』がついに完成して、発表そして上演することになりました、感謝
致します。

敬愛する周総理が生前に私に王昭君歴史劇を書く任務を与えました。
私は周総理のお考えが、この題材によって我が国各民族の団結と民族間

の文化交流をたたえることにあとと理解しております。

この脚本を書くには、たいへん長い時間がかかりました。構想をはじめたのは、まだ60年代のはじめでした。その後「四人組」の妨害によって、私は10年あまり筆を置きました。いまやっと書き上げたのです。ただとてもつらいことに、敬愛する周総理にお目にかかれなくなり、周総理の意見を二度とお聞きすることができなくなってしまいました。(8)

建国30周年記念の「献辞」で、曹禺は周恩来から与えられた「任務」だと明記する。そして作品の主題は、Bと同じように民族の団結にあるだと言いい、それは周恩来の考えを自分が斟酌したものだと説明している。

D 曹禺「關於話劇『王昭君』的創作」(初出:『人民戲劇』1978年12期)

「ここで、『王昭君』の創作問題についてお話ししましょう。この劇は敬愛する周総理が生前に私に与えた任務なのです。それは1960年以前のこと、周総理は私たちに、大漢族主義はいけない、みだりに尊大になってはいけないと指示しました。それはモンゴル族と漢族の婚姻問題の話から始まったのです。周総理は、漢族の女性に少数民族と結婚するように呼びかけようとおっしゃいました。王昭君のことに話が行くと、周総理は私を指さしておっしゃったのです、「曹禺、君が早く書きなさい」と。私に王昭君の脚本を書くことを求めたのです(原文「要」)」(9)

これは曹禺が1978年、文化部文学芸術研究院主催の「歴史劇と民族関係座談会」で発言した内容を『人民戲劇』が編輯したもの。作者以外の手が加えられているが、『人民戲劇』に掲載後そのまま、翌1979年2月四川人民出版社より刊行された『王昭君』にBとともに収録されている。

この文章では、時期が「1960年以前」とされている。Cと同じく周総理

から与えられた「任務」だとしているが、その内容は漢族の女性に少数民族と結婚することと呼びかけるといったものだと具体的にされており、BやCの「団結」や「交流」とはニュアンスがずいぶんちがっている。

E 曹禺「昭君自有千秋在——我為什麼写王昭君」（初出：『民族団結』1979年2期）

「私がなぜ王昭君を書いたのか？それは敬愛する周総理が私に与えた任務なのです。覚えていますか、それは60年代初めのある午後、政協礼堂で、総理と私たちがいっしょにお話しているとき、内蒙古のある領導同志が総理に、内蒙古地区の鉄鋼の都包頭では、モンゴル族の男性が漢族の結婚相手をさがそうとしてもいささか難しいんです、漢族の娘たちはモンゴル族の若者のところに嫁に行きたいとはふつう思いせんから、と報告しました。周総理は、漢族の女性に少数民族と結婚するように呼びかけよう、大漢族主義はだめだ。昔、王昭君がいて、そうしてではないか！そして、総理は私に、「曹禺、君が王昭君を書きなさい」と言いました。総理はさらに『王昭君』が早く完成することを祈って、みんなに乾杯させたのです」⁽¹⁰⁾

Dとほぼ同じ頃にかかれたと思われる文章だが、周恩来から言われた時については、60年代初めとDとは異なる時を示している。歓談の内容などがより具体的になり、場所は太平橋大街にある「政協礼堂」だと明確に言われている。頼まれた内容についてはDとほぼ同じで、前祝いの乾杯の話が加わっている。

F 「曹禺同志談新作『王昭君』」（初出：『解放日報』1979年2月4日）

「曹禺同志はなぜ王昭君を書こうとするのか、またなぜ王昭君の伝統的

なイメージを変えようとするのか？彼は創作の過程を振り返って言った、「これは周総理が生前に私に与えた任務なのです。書き始めてから完成するまで、すでに十年以上たちました。おおよそ1960年ごろ、あるとき多くの中央領導同志たちと一緒に食事をしたのですが、このごろ漢族の女性が少数民族と結婚したからという話が出たのです。周総理は、それは実によくない。だが、こうした状況は命令一つで変えられないものだ、世論を通じて宣伝をし、呼びかけよう。古代には王昭君が匈奴に嫁に行った話があるではないか、とおっしゃいました。そして私に、「君が書きなさい」とおっしゃったのです。私はそれを聞いてこの任務はとても光栄で、とても重要なことだと思いました。それで私は書き上げようと決心したのです。」⁽¹¹⁾

ここでもやはり「任務」ということばが使われている。時は1960年ごろとされ、場所は示されないが、多くの中央領導同志たちと一緒に食事をしたときである、とEともやや異なった状況を語っている。周恩来の言葉として記されている「命令一つで変えられない～宣伝をし、呼びかけよう」という部分などの細部は、新聞社側によって相当の加工がなされているように感じられる。

G 訪曹禺（初出『文匯報』1979年9月18日）

「彼（曹禺）は外国の一部が歴史劇『王昭君』を「填詞文学」と称していることに憤慨している。それはとても不公平だと彼は考えている。彼が『王昭君』を書いたのは、確かに周総理が与えた任務だが、しかしここに言う「任務」とは、けっして行政上の命令を指しているのではない、と語った。周総理は文芸活動においては作家の自由な仕事を尊重していて、これまでにどんな題材を書きなさいとだれかに具体的に要求する（原

文：「規定」）ことはなかった。そのとき総理は完全に相談するような言い方で、曹禺にいくつかの糸口を提供し、意見を言ったのであって、書くか書かないかはまったく曹禺自身の決定にまかせたのだ。」⁽¹²⁾

「填詞文学」とは、ここでは書くべきことが決められていて、作者はことばを埋め込むだけの作品という意味だと思われる。「填詞文学」と称している言及の存在を寡聞にして知らない。あるいは、香港・台湾の学者が「国策文学」「遵命文学」ということばを用いて批評したことを⁽¹³⁾、忌避して「填詞文学」と言い換えたものかと思われる。曹禺はそうした評価に大いに憤慨し、自分が用いた「任務」が意味する内容について弁明につとめている。

H 田本相「王昭君論」(1982年発表 『曹禺劇作論』広西師範大学出版社 2010年所収)

「およそ1960年前後に、周恩来同志が曹禺に昭君出塞を題材として新しい歴史劇を創ることを提案した。彼は早く王昭君の新しい脚本を書くことを求めた。彼は曹禺と話しているときに、我々は大漢族主義になってはいけない、みだりに尊大になってはいけない、漢族の女性に少数民族と結婚するよう呼びかけよう、と指摘した。周恩来同志はこれまで作家の仕事を尊重して、作家にどういう題材を書きなさいと命じたことはなく、完全に作家と相談するような言い方で、作家に創作の糸口を提供した。60年代初めに、曹禺は昭君出塞の歴史資料を収集し始めるとともに生活を深く体験するために内蒙古に出かけた。」⁽¹⁴⁾

CDEGを元に田本相が論文用にまとめたもの。かなり田本相による加工がなされている。この論文では、時を1960年前後とし、60年以前を排除していない。周恩来が、「漢族の女性に少数民族と結婚するようによびかけよう」と言ったということはそのまま記しているが、そうしたことを劇作で描けと

言っているのではなく、創作の糸口として昭君出塞にもとづいた歴史劇を示唆したのだ、というGでの曹禺自身の弁明を採り入れた解釈を示している。

I 1984年7月15日 陸文璧のインタビュー「曹禺縦談創作過程」二

(初出『曹禺論創作』 上海文芸出版社 1986年11月)

「『王昭君』については、将来にきっと大論争がおきるでしょう。私は今回彼女を描こうと覚悟を決めたのです、私自らきっと論争になると予想していましたから、まあ対応できるでしょう。でもこれは私自身が望んだことです、周恩来同志もかつてこのことに関心を持ちましたが、でもそれは指導者の命令というものではありません、彼はけっして私にああ書けこう書けと具体的に要求した（「規定」）ことはありませんから。『王昭君』は私自身の願望にどおりに書いたのです。」⁽¹⁵⁾

インタビューの日時について、原文では「1974年7月15日」となっているのだが、発言内容は「四人組」逮捕後のことなので、「1984年」の誤植だと判断したい。

ここで言われる「論争」は、60年当時もあった歴史劇論争に類するものを指している。ここでも、『王昭君』は曹禺自身による創作であって、周恩来の命令ではないという弁明につとめている。

J 田本相『曹禺伝』 1986年第二稿

「間もなく、祖国の30周年の慶びを迎える。彼は脚本を書かないわけにはいかず、いったい何を書けばいいのか考えていた。ただ彼は胸中にめぐるものはやはり周恩来が彼に書くことをたのんだ『王昭君』であることに気づいた。昔の情景がつぎつぎに目の前に現れた。それは1961年の初春に、周恩来同志が文芸界の友人たちと懇談したときのことだ。内

蒙古のある領導がかつて周恩来に、内蒙古地区、鉄鋼の都包頭では、モンゴル族の青年が漢族の娘を結婚相手に捜すのはとても難しい、漢族の娘はふつうモンゴル族の若者の嫁になりたくないからだ、と報告したという話に及んだ。周恩来同志は、漢族の女性を少数民族と結婚するように呼びかけよう、大漢族主義はいけない、昔は王昭君がいてそうしたから、と言った。そして、曹禺に「曹禺、君が王昭君を書きなさい」と言っ
て『王昭君』が早く発表されることを祈って、みんなに乾杯を求めた。

周恩来の頼みを完成させるために、彼はその年の夏に、翦白賛たちとともに、内蒙古自治区主席ウーランフーの招きに応じて、内蒙古に見学訪問に出かけた。」⁽¹⁶⁾

1991年に出版された『曹禺研究資料集』には田本相が1985年に作成した「曹禺年譜」が収録されている⁽¹⁷⁾。その「年譜」には、周恩来が曹禺に頼んだこの件のことが記されていない。明確に繫年することができなかったためと推測される。しかし、ここではその時を1961年の初春と一步踏み込んでみせた。おおよそEの記述に従っているが、場所は明記せず、同席したのは文芸界の仲間だとEとは異なる内容を記している。ただし、注意しておきたいのは、これは「王昭君」執筆を再開する時点での回想としてはめ込んでいるのであり、確定された事実を記録する書き方とは相違させているということだ。おそらく熟慮の結果、繫年するとすれば1961年初春が最も穏当だと判断したのだと思われる。

K 梁秉堃『老師曹禺の後半生』 作家出版社 2010年

「(1962年2月17日に周恩来が中南海に北京の劇作家を集めて座談会を開いた)それから間もないある春の夜に、周総理は数人の文芸界の友人を食事に招いた。曹禺先生も出席した。その席で、周総理は文芸創作

の問題について言い及んだ。彼は言った、「漢族の女性に少数民族の男性と結婚するように呼びかけよう、大漢族主義をやってはいけない。むかし王昭君がいたがそうしたのだ」と。彼はこの時顔を曹禺先生のほうに向けて、「老同学、君が王昭君を書きなさい!」と言った。曹禺先生はちょっと考えて、笑いながら頷いた。周総理は喜んで、すぐに酒杯を挙げて、みんなに『王昭君』の脚本が早く発表されるよう乾杯を求めて、率先して酒杯を飲み干した。その後、周総理の頼みを完成させるために、曹禺先生は内蒙古自治区主席ウーランフーの招きに応じて、草原に見学訪問に出かけ、生活を実体験した。」⁽¹⁸⁾

1954年に北京人民芸術劇院に入ってから、42年にわたって曹禺のそばで仕事を学んだ劇作家梁秉堃は、周恩来と曹禺のこの件を1962年の周恩来による劇作家たちに対する講話の後と見なしている。同席のメンバーなどはJに近いが、内蒙古領導同志云々の記述はなく、周恩来が文芸創作の話をしていて、漢族の女性と少数民族との結婚を呼びかける話になったとつないでいる。最も近年に記されたものであるが、一に記したように、田本相は解放後の作品について曹禺に何度尋ねても答えてもらえなかった。それに比すれば、曹禺と長年身近で接していた梁秉堃にはこの件を直接聞いていた可能性が高い。「曹禺先生はちょっと考えて、笑いながら頷いた」という記述も、あながち梁の作文とばかりは言えないのではないか。むしろ、周恩来と曹禺のやりとりの実相をうまく掬い取っているように思える。

周恩来が曹禺に「王昭君」を書くように求めたというエピソードに関連する言及をAからKまで13例みてきた。そこからわかるように、曹禺自身の言及も一定せず、内容は細部において異なっている。インタビューに基づく再現の場合、編者や記者の手が加わっている可能性は小さくない。そのためあっても、曹禺自身の言述をもとに、出来事を再表現しようとする研究者

の記述も一定しない。

ここで、少なくとも実際にあったであろう出来事の内容を整理してみると、①周恩来、曹禺を含む一団が飲食をしていたこと。②包頭鉄鋼の蒙古族青年と漢族女性の間の結婚がうまくいかない、という話がでたこと。③周恩来が、漢族女性に少数民族の青年との結婚を勧める活動を行おうと言ったこと。④周恩来が、曹禺に「王昭君」劇を書きなさい、と勧めたこと。⑤「王昭君」劇の完成を祈って乾杯したこと。以上はおおよそ事実とみなしてよいだろう。しかし、「いつ」「どこで」「どんな人たちと」「どんな風に（どんな雰囲気で）」は、確定することが難しい。

曹禺の伝記的研究の第一人者は田本相であるが、彼の仕事の成果を通じても確定は容易ではないようだ。曹禺本人や関係者への訪問インタビューによって事実を積み上げていく田本相の方法からすれば、たとえば、周恩来を含むこの飲食の宴に同席していたのが、もし作家協会関係者だった場合、その人が存命のかぎりそれほど難しくなく証言を得られたのではないだろうか。しかし、田本相がそのような証言を得たという形跡は見当たらない。しばらくは、既存の資料から妥当な線を探る作業をつづけるしかないようだ。

三

「いつ」については、曹禺自身が①1960年以前、②およそ1960年ごろ、③1960年代初め、と発言を変えていることがそもそもの混乱のもとになっている。この発言にもとづいて、考証をしている田本相も①1960年前後、から②1961年春へと判断を変化させている。ただし、注意しておくべきなのは、『曹禺年譜』は最新版も旧版どおりで、この出来事を確たる時点に置くことをしていない⁽¹⁹⁾。『曹禺伝』においても、「1961年春」は時間系列の地の文で記述されてはいない。1978年に曹禺が『王昭君』を再執筆する場

面において、回想形式を用いて曹禺の胸中を表出しているだけなのだ。これは、1991年に出版された『曹禺評伝』でも同じで、回想形式が採用されている。⁽²⁰⁾ 梁秉堃は1962年とするが、内蒙古訪問が1961年夏であることは動かしがたいので、これは誤りとみなしてよい。

そうだとすれば、田本相の判断による「1961年春」が最も妥当なところと言えそうだ。推し量るに、田本相は曹禺の仕事の流れから穏当な時点を設定したのであろう。前作『胆剣篇』を1960年に完成させていた曹禺は、1961年春に周恩来から『王昭君』を書けと言われたので、さっそく夏には資料収集をかねて内蒙古訪問に出かけ、翌1962年から書き始めた。1960年以前や1960年に当てると、間に『胆剣篇』が挟まってしっくりしないという判断である。

しかし、小論では、1960年前後の状況を確認してから、もう一度「いつ」の問題を検討し直すことにしたい。そこで、以下におおまかな状況を略年表式に示すことにする。

〔略年表〕⁽²¹⁾

1954年、人民共和国の最初の全国人民代表大会が開かれ憲法が採択された。

曹禺は人民代表に選ばれて出席している。

綏遠省が内蒙古自治区に併合されたのもこの年である。また、包頭鉄鋼工場が建設されている。

1956年、「百花齊放、百家争鳴」方針が出された。

1957年、曹禺は共産党に入党した。

「整風運動」が指示され（4月）、反右派闘争へ進展する。

8月、青島会議において周恩来が民族政策を発表、少数民族に対して

「自決権」を認めないことを明らかにした。

10月には、中共中央が「少数民族内において整風と社会主義教育を行うについての指示」を出した。

1958年、「大躍進」政策が実施される。曹禺は「大躍進」を積極的に支持して、二論文を発表している。

8月、中共中央が「青年を辺境・少数民族地区に動員し社会主義建設に参加させるについての決定」を出す。

毛沢東が、早急過ぎる人民公社化を反省して、次期国家主席を辞退した。

1959年、1月、内蒙古の牧業区で人民公社化が完成。

3月ダライ・ラマが「チベット独立」を主張して、反乱を発動。

4月の第2期全人代では、劉少奇が国家主席に選ばれ、チベット問題が重要なテーマになった。

曹禺は「提高芸術的質量」を演説。

5月には、郭沫若の歴史劇「蔡文姬」が発表されている。

この年、包頭鋼鉄コンビナートが操業を開始した。

1960年、文芸政策を指導する周揚が歴史劇編集を指示。以後、歴史劇の創作が盛んになる。

夏、北戴河での中央工作会議で、大躍進政策に対する調整政策が検討される。

1961年、曹禺の共同執筆脚本『胆剣篇』が完成し発表される。夏に内蒙古自治区を見学訪問した。

中共中央工作会議の席上、毛沢東が大躍進政策で一部自己批判を行う。

1962年、拡大工作会議で、大躍進の行き過ぎを正して、調整政策を貫徹することを決定。

曹禺は北戴河で『王昭君』を書き始めた（8月）。

確かに、「1961年春」説は第一人者の見識として尊重すべきであろう。しかし、上記の略年表を見るまでもなく、この時期は「大躍進」政策で国中が大きく揺れた時期であり、わずかの時間の違いで状況は大きく異なるということに留意したい。61年春は連年の飢饉で大躍進政策の破綻が明らかになっていた時期である。果たしてこのような時期に、漢族女性に少数民族の青年との結婚を呼びかけよう、などと一国の総理が真顔で言うものだろうか。

私は、むしろ1959年に周恩来とのエピソードを想定してみる方が、情況としては腑に落ちることが多々あると考える。つまり、「大躍進」政策に一部行き過ぎが見られたとしても、全体としては正しいものと信じられ、発展へと希望を輝かせていた頃の出来事とみなすのが適切だと考える。

その理由としては、以下の5項をあげたい。

- ① 少数民族問題が重大な問題となっていたこと。周恩来の1957年青島会議での少数民族問題についての講話は、少数民族側の反発を招くことになり、彼にとって大きな懸念となっていた。
- ② 青年を辺境・少数民族地区に派遣して社会主義化を促進しようとする政策が1958年から行われている。漢族若年層の移動ということでは類似の環境と見なせる。
- ③ 包頭鋼鉄の状況は内蒙古自治区側と党政府側の間で重要問題であったこと。準備段階から操業へと向う段階で、従業員の民族構成は懸案でありつづけた。包頭鋼鉄のことが話題になるのは、1959年が最適である。
- ④ 第1期全人代から人民代表だった曹禺は、1957年に共産党員になった。党員としての経歴の浅い曹禺がことのほか党中枢に追従したことは理解できる。58年、「大躍進」を積極的に支持したのはそのためであろう。今、1959年の全人代の演説の終わりの部分を見てみよう。演題は「戲劇芸術の質を高めよう」というものだが、最後に特にチベット問題に触れて、下のように結んでいる。

「西藏は祖国の大家族の一員です。唐代の文成公主が遠く嫁いで以来、漢族とチベット族の文化と生産習俗は切り離すことのできない兄弟のような関係を結んでいます。13世紀以降、西藏はずっと中国の領土なのです。いかなる外国の干渉者と野心家が我が国の内政に干渉し、我が国の統一を破壊することを、我々は決して許しません」（初出：『人民日報』1959年5月3日）⁽²²⁾

文成公主の「和番」を例にして民族団結と国家統一を訴える姿勢は、『王昭君』の主旨とほぼ同一である。周恩来は、曹禺のこの発言を踏まえて、王昭君のことを言い出したのではないだろうか。

⑤曹禺には周恩来を追悼回顧した文章が3篇あり、そこには両者の公的な場での交流のほか、極めて私的な交流が熱く語られている⁽²³⁾。ところが、この「王昭君」にまつわるエピソードには一切触れられていない。このことはこのエピソードが「任務」と呼ばれるような重みのあるものとしては、曹禺自身に把握されていなかったことを物語る。だとすれば、エピソードがあった時期と取材を兼ねた内蒙古訪問旅行した時期が離れていることの方が自然だろう。

以上、周恩来が曹禺に「王昭君」を書くように求めたというエピソードは、1959年にあったことであるとみなす。

四

前節で、周恩来との間にあったエピソードは、「どこで」「どんな人たちと」ということは不明なままだが、「いつ」については1959年、「どんな雰囲気」

については、「任務」が言われるといった重みのあるような場ではなかったというのが、小論の立場である。

この立場に立って、このエピソードから読み取れる問題を指摘して、「結び」に代えることにしたい。

曹禺が『王昭君』を創作した動機として周恩来とのエピソードを明らかにし、さらにそれを「任務」ということばで言い表した。これは建国30周年記念に合わせた演出とみなすべきものののだが、『王昭君』は当初この演出とともに大成功を収めた。しかし、やがて作者の政治に追従する姿勢に対する批判が出され、曹禺はしきりに弁解に努めるようになっていった。

「民族団結・民族交流」を主旨としたことは曹禺自身の意思であるというのがその弁解だ。その主旨も、また周恩来の言う「大漢族主義はいけいない、みだりに尊大になってはいけいない」も、それ自体は誰が見ても正しい意見である。

ところで、この発言の背景に、1957年の青島会議における「民族自決権」の禁止や、1958年の漢族青年の少数民族地区への派遣促進政策といった状況を置いてみるとどうだろう。因みに青島会議での周恩来の講話がもたらした状況に対して、蒙古族では、自決権の禁止は、離婚が認められない結婚のようなものと不満を表したという⁽²⁴⁾。

また、エピソードに出てくる包頭鉄鋼云々のことであるが、注意しておくべきなのは、包頭は旧綏遠省の大都市であり、建国以来、内蒙古自治区側から合併が強く要求されていたところであるということである。年表に示したように、1954年に人民政府は合併を承認しており、それとともに自治区内に漢族の移民がはじまることになった。いわば、包頭を含む綏遠省合併は、内蒙古側からの要請に応えた「結婚」なのだ。その「結婚」の結果どうなったのか。民国以来漢族が占領統治してきた綏遠省の漢族人口は圧倒的であり、合併以後の内蒙古自治区における人口比が、蒙古族1に対して漢族

7になるという人口比率の大逆転を生じさせることとなったのである。内蒙古自治区側は合併要求が間違っていたと痛感せざるを得なかったのだが、事態を取り戻すことはできない。さらに「自治権」が禁止されてしまっは、せめてこれ以上の漢族の移民だけは阻止したいと彼らが考えるのは理解できる⁽²⁵⁾。エピソードが物語るのは、こうした蒙古族側が抱え込んだ事態を、周恩来や曹禺がほとんど顧慮している形跡がないということである。

歴史劇「王昭君」の脚本の内容については、別に稿を構えることにしたいが、敢えて言えば、エピソードから読み取れる曹禺の事態認識の浅さこそが、作品内容の浅薄さを示している。文革中の少数民族区における苛烈な暴政が明らかになるにつれて、党中央の民族政策への信頼が大きく揺らいだ。曹禺には、党中央の方針の旗振り役をした自覚はあったろうし、おそらく自分の認識の甘さを痛感せざるを得なかっただろう、それが一にあげたような作品の否定的評価につながったのではなかろうか。小論はこの点については示唆までにとどめておきたい。

【注】

- (1) 梁秉堃『老師曹禺の後半生』 作家出版社 2010年 p 9
- (2) 田本相 劉一軍『曹禺訪談録』 百花文芸 2010年 p 58
- (3) 同 p 289
- (4) 同 p 262
- (5) 第4期は4月。『曹禺全集』(6) 花山文芸出版社 1995年〔内部資料・電子図書版〕
- (6) 『曹禺全集』(7) 花山文芸出版社 1995年〔内部資料・電子図書版〕
- (8) 曹禺『王昭君』四川人民出版社 1979年2月
- (9) 同
- (10) 『曹禺全集』(5) 花山文芸出版社 1995年〔内部資料・電子図書版〕
- (11) 同
- (12) 同(6)

- (13) 編輯委員会編『曹禺、王昭君及其他』 乙、《王昭君》評論 香港・良友図書
公司 1980年9月 参照
- (14) 田本相『曹禺劇作論』 広西師範大学出版社 2010年
- (15) 同(6)
- (16) 田本相『曹禺伝』 東方出版社 2009年
- (17) 田本相・胡叔和編『曹禺研究資料集』上「曹禺年譜」 中国戯劇出版社
1991年。なお、最新の田本相・阿鷹編著『曹禺年譜』(北京出版社 2010年)
においても1961年には繫年されていない。
- (18) 梁秉堃『老師曹禺の後半生』 作家出版社 2010年
- (19) 田本相・阿鷹編著『曹禺年譜』 北京出版社 2010年 には1979年12月の
項に『人民戯劇』に発表されたとし、「1960以前の事」と原文のまま引用し
ている。(p 179)
- (20) 田本相『曹禺評伝』 重慶出版社 1993年 p 264
- (21) 家近亮子編『中国近現代政治史年表』 晃洋書房2002年、加々美光行『知ら
れざる祈り・中国の民族問題』 卷末年表 新評論 1992年、楊海英『墓標
なき草原(下)』 卷末年表 岩波書店 2009年 などを参考、引用した。
- (22) 同注(10)
- (23) 「我們心中的周總理」(初出:北京師範大学編『敬愛的周總理永遠活在我們
心中』第4集、1977年2月)『全集』(6)所収、「獻給周總理的八十誕辰」(初出:
『北京文芸』1978年第3期)『全集』(6)、「幾点随想」(初出:『劇本』1979
年2月号)『全集』(5)所収 の3篇である。
- (24) 楊海英『中国とモンゴルのはざまで』 岩波現代全書 2013年 p 112 参照
- (25) 同 p 105、p 111 参照